

高齢者施設 増える地域交流

カフェ、サロン併設



近所の人々が気軽に足を運べるカフェや交流スペースを設け、地域とのふれあいによる「なじみの関係」づくりを力を入れる高齢者の施設が増えている。住み慣れたところで顔見知りもいれば、認知症になっても心の混乱が少なくて済むからだ。「将来、この施設に入りたい」と考える人向けに高齢者住宅を併設する動きもあるなど、孤立防止や生きがいづくり、世代間交流の場として、施設の役割に広がりが見込まれている。

(報道センター 坂本有香)

「また一緒にご飯を食べられるなんて、うれしいですね」。12月半ば、後志管内余市町にオープンした高齢者住宅に入居した阿部照子さん(87)は、併設したデイサービスセンターが地域の人を招いた食事会で、古い知り合いを見つけて笑顔を見せた。

この住宅とデイサービスは、認知症の高齢者が暮らし「グループホームなまじま」に隣接。運営する中島内科院長の中島恒子さん(57)は「いつかはホームに入りたけれど、まだ早い。でも一軒家で一人暮らしをするのは心配、という患者さんの声に応じて建てました」と話す。

以前からグループホームの庭を使った盆踊りや餅つきで地域と交流してきたが、今後は「デイサービスで毎週、「地域食堂の日」を設けて安価で昼食を提供、「地域の人が介護と接する『入り口』にしたい」(中島さん)という。

地元の大川第4区会副会

住民も利用「介護と接する入り口に」

長の子金沢治さん(71)は「町には一人暮らしの高齢者が多い。週に1度でも楽しく昼食をとる機会があれば、引きこもり防止にもつながる」と期待する。

2014年10月にオープンした札幌市清田区のサービスタウン付き高齢者向け住宅「美しが丘テラス」は、建物内に地域交流スペースを設けた。広さは約110平方メートルで、町内会に無料で貸し出したり、入居者や地域住民が参加できる工芸教室を開く。併設されたカフェも人気だ。無農薬野菜を使った日替わりランチが評判で、9割が施設と関係のない一般客だという。入居者はおしゃれをしてカフェに行くそう。担当者は「生活の刺激になっている」と喜ぶ。

渡島管内七飯町にある「福祉村 四丁目の夕日」は子供と高齢者の世代間交流を深める取り組みが注目されている。敷地内に通いと訪問、泊まりを一体的に提供する「小規模多機能型居宅介護事業所」、高齢者住宅、学童保育が建つ。一角には地域交流サロンや駄菓子屋も。日中は近所の住民がサロンに集い、放課後には子供の声絶えない。

同様の取り組みは全国でも広がる。福岡県大牟田市では、小規模多機能施設にサロンの併設を義務付けた。国も地域で介護予防に取り組みの拠点として着目。本年度の補正予算案では、こうした場の整備に使える助成金として、当初予算の2倍超の15億5千万円を計上し、整備を後押しする。

北海道情報大情報メディア学部教授の隼田尚彦さん(環境行動学)は「元氣な時も介護が必要になった後も、地域との結びつきを感じながら暮らし続けるために不可欠な取り組み。『切れ目ない支援』が可能になる」と話している。



デイサービスの利用者と地域の人と一緒に昼食を楽しむ取り組み。食事中も会話が盛り上がり笑顔が絶えない。

後志管内余市町